Osaka University Knowledge Archive

Title	ドゥルーズの動的発生論における出来事と身体 ：「もの」から「こと」への移行について
Author(s)	山森, 裕毅
Citation	年報人間科学. 2008, 29-1, p. 165-182
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4089
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

ドゥルーズの動的発生論における出来事と身体

―「もの」から「こと」への移行について

山森　裕毅

〈要旨〉

本稿は、ジル・ドゥルーズの『意味の論理学』において展開された「動的発生」という発想を、「身体」概念を中心に読み解いていく試みである。『意味の論理学』は、意味の発生のシステムを分析することを主題としている。意味に関する研究は、多くの場合、言語の研究に終始するが、ドゥルーズの場合は、身体＝物体の状態も巻き込んだシステムとして研究されている。なぜなら、言語を話すという行為は身体によって可能になるからである。ところで、もちろん身体は、幼児がそうであるように、はじめから言語を話せるわけではない。

では、身体はどのような段階を経て言語を話すまで有機体化されるのだろうか？それをドゥルーズは、メラニー・クラインによる児童の精神分析に依拠する形で検討している。また、ドゥルーズは意味の発生を出来事の発生でもあると考えている。そうなれば、出来事の発生も身体の有機体化が担うことになる。ドゥルーズの「動的発生」とは、このような身体の段階的有機体化の過程を言う。そして、この過程で身体と共に重要になってくるのが「情動」である。

本稿では、まず一章でドゥルーズがクラインの精神分析に依拠する理由を検討する。次いで二章で『意味の論理学』における動的発生の構図を描く。そして三章で動的発生において身体と情動との関わりを明らかにする。

キーワード

ジル・ドゥルーズ、動的発生、身体の有機体化、出来事、情動

はじめに

ドゥルーズ哲学において身体論は可能か？可能だとすれば、それはどのようなものか？本稿は、この問いに応えるために、ドゥルーズが１９６９年に出版した『意味の論理学』において登場した「動的発生」を扱うものである。

より具体的な問いを提示する前に、必要事項を整理しておこう。『意味の論理学』は、ドゥルーズが１９６８年に出版した『差異と反復』において部分的にしか扱わなかった「言語」や「意味」、「出来事」を主題として扱ったものである。言語や意味を主題とする哲学は多々あるが、出来事を主題として扱うということはどういうことだろうか？ドゥルーズは、『意味の論理学』以降に発表された、「主体についての質問への答え」という短い論文において次のように書いている。

「［主体の概念は］第1に、普遍化の機能であって、普遍的なものがもはや客観的な本質によって表象されず、思惟的あるいは言語的な行為によって表象される領野において機能するのである。…第2に、主体は個体化の機能を果たすのであって、個体がもはやひとつの物でもひとつの魂でもなく、生きていて、そして生きられている、話し、話されている一人の個人である領野において機能するのである。…もはや人称的ではない、個体化の様々な形態が認められるようになった。…心理学的あるいは言語学的な全ての人称主義に反して、出来事は三人称、そして同じく特異なものの〈四〉人称、非‐人称的あるいはそれの促進を導く、…要するに、私たちは信じるのである、主体の観念が前‐個体的特異性と非‐人称的個体化のために、その多くの利点を失ったということを。」(1)

この記述で言われているのは、主体の概念を主軸に据えた哲学(2)から非‐人称的な出来事の哲学への移行は、言語をその人称主義的な在り方から解放することで為される、ということである。そしてそれは、前‐個体的な特異性と非‐人称的な個体化の観点、つまり出来事の観点から言語を捉え直すことである。出来事を主題的に扱うことは、言語にその在り方の変更を迫るものである、とドゥルーズは考えている。そしてこの作業は、まさに『意味の論理学』において為されている。

では、『意味の論理学』はどのように出来事にアプローチしていくのだろうか？まず、ドゥルーズは命題を構成する三つの作用を提示する。そしてその中でどれが命題を可能にしているのか、命題を可能にしている条件を問うのである。それらの作用とは、指示作用（物や真偽）、表出作用（発話者や「私」）、意義作用（真偽の条件や概念）であり、ドゥルーズはこれらが循環しながら支えあい、結局は命題によってこれら三つの作用が可能になっていることを示す。そして、これらの作用が産み出すパラドックスから、命題のもうひとつの次元である「意味」の領野を発見する。そしてドゥルーズは、

この意味の領野を命題の条件であることから、超越論的領野と呼ぶ。ところでドゥルーズが言うには、命題の意味は物の状態のうちで実現する可能性を持つ。これを「出来事」と呼ぶ。つまり超越論的領野は一挙に二つの仕方で、つまり言語においては意味として、物の状態においては出来事として表現される。それはその領野を意味＝出来事として扱うことでもある。しかし本稿の便宜上、今のところ、超越論的領野が命題や言語と関わる限りで「意味」、物の状態に関わる限りで「出来事」と使い分けることにしたい(3)。

このような区分けを用いたとき、『意味の論理学』の二つの焦点である、「静的発生」を意味の理論、「動的発生」を出来事の理論と考えることができる。より厳密に言えば、「静的発生」は超越論的領野から意味が発生するその仕方、出来事が物の状態のうちに実現するその仕方を理論化したものである。また、「動的発生」は物の状態から超越論的領野が発生するその仕方、出来事が物の状態から発生するその過程を理論化したものである（動的発生には意味がそこに内属することになる言葉の組織化・文法化も含まれる）。

私たちの関心は「動的発生」にある。なぜなら、動的発生論はドゥルーズによる身体論と言えるからである。動的発生論で言われる物の状態としての「もの」とは、後で見るように、「身体」のことである。あるいは身体でも物体でもあるような「corps」のことである。出来事が発生するためには身体の働きが不可欠なのである。ここで、私たちは本稿の冒頭で立てた問いを次のように具体的にしよう。「出来事のために身体に何ができるのか？」。これは、身体を通して出来事を認識する仕方を問うものでもなければ、出来事の内部での身体の在り方、行動の様式を問うものでもない。そうではなく、出来事の発生のために、身体はその質料性を素材にしながら何を為すのか、何を為すのでなければ出来事は発生しないのか、という出来事発生の身体・物体的な過程を扱う問いなのである(4)。

1. メラニー・クラインとアントナン・アルトー

私たちは動的発生論を上で、超越論的領野が物の状態から発生してくるその仕方を問う理論であると言った。ドゥルーズは、『意味の論理学』第27のセリーにおいて「問題なのは、物（choses）の状態から出来事へ、混在から純粋な線へ、深層から表面の生産へと直接的に移行する動的発生である」(5)と言っている。これは「いかにして非物体的な出来事が物体（corps）の状態から生じるのか」(6)と問いの形で言い換えられている。これは「もの」が「こと」を成果として発生させる秩序を探求するという宣言であるが、「もの」と「こと」の存在論的差異や認識論的差異をただ提示するだけでなく、それらの連動を示そうという点でドゥルーズの独自性がある。

では、動的発生はどのように探求されるのか？ドゥルーズは「もの」から「こと」への移行を、音の状態である「雑音」から「言葉」（langage）への移行と考えている。出来事である超越論的領野は意味として言語にも関わるのだから、私たちが発話するためには物体が発する雑音を言葉へと組織化することが求められる。ドゥルーズ

はこの過程を精神分析、特にメラニー・クラインの業績に依拠しながら、段階的発達論として描こうとする。雑音は段階を経ながら言葉へと組織化されるのだが、その発達において最も重要な役割を占めるのが「身体」(corps) である。どういうことだろうか？雑音を発するのは物体であり、言葉を発するのは身体（口、舌、喉、呼吸など）である。この事情を捉えるように、物体と身体はフランス語で corps という一語で表される。要するに、雑音から言葉の組織化への発達は身体が有機体化（組織化 [organisation]）される過程でもある。雑音から言葉の組織化への移行は身体を介さずには不可能であるということだ。それは、無機物により近い状態から出来事を表現するようになる状態までの身体の有機体化であり、ドゥルーズ自身はアルトーの「器官なき身体」からライプニッツ由来の個別的モナドの身体[7]までの発達過程として構想している。動的発生にとって身体は本質的な要素なのである。

1-1. クラインの理由

このような事情の下で、なぜクラインの精神分析が援用されたのかを考えてみよう。

動的発生論は、言葉が組織化される過程である。このような過程を研究する領域には幼児の発達研究と動物の言語研究の二つがある。ところでドゥルーズは、静的発生論において既にラッセルやフッサールなどの論理学やルイス・キャロルらの文学に言及している。ここから、ドゥルーズが扱おうとしているのは、人間が使用する限りでの言語であると言える。そこで、彼には幼児の発達研究がここでは適正と思われたのだろう。クラインの分析対象は、まさしく言葉の獲得過程にいる幼児である。しかし、精神分析の祖であるフロイトもまた幼児を分析の対象にしていた。フロイトには幼児期において幼児がどのような性理論を持っているかに関する研究がある。また、クラインを幼児の分析に向けたのは、フロイトによるハンス少年の分析であった[8]。では、なぜフロイトではなくクラインだったのか？

ひとつは、彼らの技法上の違いを挙げることができる。フロイトの場合、対象の分析は自由連想法によって行われる。これは言葉によって紡ぎだされていく連想から、無意識へと接近し、抑圧されている欲望を解釈する技法であり、十分な言葉の組織化に依存している。それに対して、クラインの対象は幼児であるため、十分な言葉の組織化に達していない。彼女は、そのような幼児の無意識に接近するために、遊戯療法という技法を発案した。クラインは次のように書いている。

「私たちが幼児の分析を長期間、言葉による連想なしで行わなければならない理由は、幼児たちが容易に話すことができないからだけではなく、彼らが苦しんでいる急性の不安が表現のより直接的でない形態を用いることだけを彼らに許すからである。おもちゃと行動を用いた表現の原初的で太古的な様態が、幼児にとっての表現の本質的な媒体なので、私たちは確かに、会話だけを用いた幼児の深

い分析を果たすことは決してできないだろう。」(9)

ここで示されているように、幼児は言葉の組織化以前に別の方法で無意識を表現する。これが遊戯である。遊戯療法とは幼児の遊戯を通して彼らの不安や精神内界を解釈する技法である。言葉の組織化を扱う動的発生論にとって、言葉を持つ以前の幼児の世界への関わり方を発見したクラインのほうが、言葉への依存が強いフロイトよりも適正であるのは明白である。

では、クラインがこの技法によって見出した幼児の世界とはどのようなものか？クライン派の精神科医、松木邦裕はこの世界を次のように説明している。

「赤ん坊の内的世界は混沌としています。多数の断片的な自己や断片的な対象群であり、まだ、まとまった形で本人に実感されるものではまったくありません。…たとえば、ここでの対象とは、母親の声であったり、母親の肌触り、あるいは、におい、乳房や乳首といった身体の一部の視覚像、…生時下にはもっとぼんやりとした不定な断片の対象でしょう。…内的世界にあぶくのようにしばらく存在して、やがて消えてしまったり、あるいはその子の内界に確固として存在し続け、さらには他の断片と結びついて、より確実で明確な対象になったりしましょう。」(10)

内的世界とは幼児の心の中にある世界であり、そこでは幼児は、自己にせよ対象にせよ断片化した形で保持している。この断片化された自己・対象が関係を形成して、統合された全体的自己・対象になっていくことが、幼児が現実に参与していく過程となっている。

この過程を、クラインの「幼児の情緒生活についてのいくつかの理論的帰結」(11)から、まとめてみよう。まず、自己と対象がある。対象には、善き対象と悪い対象の二つがある。次に、自己と対象との関係の仕方があり、それは分裂、投影、摂取、同一視、排出などである。そして、摂取が口と関わり、排出が肛門と関わるように、身体の部分が対象とそれぞれの仕方で関わる。身体の部分と対象との関わりは、統合へ向かうように段階的に発展するが、これを方向付けるのが不安や羨望、償い、罪悪感などの情動である。このシステムの発見が、ドゥルーズがクラインの理論を援用する二つ目の理由である。ドゥルーズはこの過程を言葉の組織化の過程と重ね合わせているのだが、ここで重要なのは、その組織化が身体の統合によって為されるということであり、そこに彼は動的発生のモデルを見出しているのである。

（恐らく三つ目の理由があるはずである。というのは、動的発生に先立つ静的発生の分析に、ドゥルーズはラカンの精神分析理論を援用している。ラカンの理論は強く言語に依拠するために動的発生には援用できない。しかし、ドゥルーズは動的発生と静的発生を統合するものとして、精神分析を考えていた可能性がある。そうでなければ、発達心理学ではなく精神分析が選ばれた理由を説明することが困難である。だとすれば、ラカンとクラインの理論的な親近性

あるいは連続性を考慮する必要もあるだろう。しかし、それはドゥルーズがどのように精神分析を捉えていたかという別の大きな問題でもあるので、本稿では触れ得ない。(12)

1-2. アルトーの理由

ところで、クラインの理論が身体の過程として理解できるとしても、それが精神分析に基づく限り、クライン自身や松木がそう理解しているように、それは心の内部の過程、精神の内部で像となる限りでの身体の過程であって、決して物体的な過程ではない。そのためドゥルーズが、クラインの理論を心的メカニズムではなく、唯物論的な過程として理解するためには、何らかの転回が必要である。この転回を彼は、クラインの理論をアントナン・アルトーの身体論と融合することで為し得ている。アルトーの身体論の特徴は、物質の流動性、イメージの物質性、呼吸の情動性などである。彼自身は次のように言う。

「否、物は無から出発して、存在にまで濃くなり、そして存在にまで寄せ集められた、無限小の精神から到来するのではない。
物は存在している身体から到来する、その身体は一から十まで引き出したのだ、
無そのものから
その身体の呼吸によって
その身体が手で制作した幾つもの身体、対象や物を。—
そしてそれは絶対的唯物論である。—」(13)

アルトーの絶対的唯物論とは、存在するのは身体だけなのだから、物だけでなく無も精神もそこから生じるはずである、と考える思想である。これは、物の状態から超越論的領野の発生を問うドゥルーズの動的発生論の先駆的発想と言える。

特にクラインの理論の身体論的転回のために重要となるのは、アルトーの「器官なき身体」という発想である。例えば、ドゥルーズは第13のセリーにおいて次のように書く。

「語-息や語-叫びにおいて、文字的、音節的、音韻的価値は、書かれることのないもっぱら音調的価値に取って代わられる、その音調的価値に、分裂症的な身体の新しい次元としての栄光の身体や、通気、吸気、蒸気、流体伝導によってあらゆることを為す部分なき身体が対応する（アントナン・アルトーの高次の身体や器官なき身体）。(14)」

ドゥルーズは「器官なき身体」を、有機体化される以前の身体の未分化な流体性として解釈し、言語の音調性や叫び、呼吸、湿り気といった分節化されていない質料性を説明するのに利用している。そして、これをクラインの「寸断された身体」との対概念として提示することで、クラインの理論を身体論として読むように導いている（「寸断された身体」と「器官なき身体」の関係は次の章で説明する）。

このことは、ドゥルーズが第13のセリーと第27のセリーに付した注から窺える。

「けれども私たちには、パンコフ女史の解釈は器官なき頭部の役割を過小評価しているように思われる。そして分裂症における生きた記号の体制は、意味の下方にある、身体の記号‐受動と身体的な記号‐能動の区別によってしか理解されない。」(15)

「より一般的に言って、私たちは分裂症についての精神分析的理論は器官なき身体の重要性と力動性を疎かにする傾向があるように思われる。私たちはこれを以前にパンコフ女史に見た。しかし、この傾向は、メラニー・クラインの著作において、よりはっきりしている。」(16)

動的発生の構図を描き出すために採られた、上記の戦略の成否を判断することは後回しにして、次に、その描かれた構図がどのようなものであったかを見てみよう。

2. 動的発生の構図

ドゥルーズは動的発生を論じるために、『意味の論理学』の第27のセリーから第34のセリーまでの8セリーを費やしている。私たちはこれを四つのパートに分けて、その構図を辿ってみよう。

2‐1. 妄想‐分裂態勢

はじまりは物の状態である。それは物理的質、能動と受動を伴う物体の混在であり、底なしの深層、雑音である。ここに生まれたての幼児が登場する。彼はクラインの恐怖の劇場の「舞台であり、役者であり、ドラマである」(17)。

幼児は母親との間に口‐乳房という関係を持っている。この関係は摂食をモデルにしており、摂取と投射のシステムを形成する。摂取し、投射されるのは善き対象と悪しき対象である。善き対象は幼児に栄養と充足感を与え不安を解消する乳房であり、悪しき対象は幼児に与えられず不安を呼び起こす乳房である。ここで母親の乳房が二つの対象として分裂させられている。生まれて間もない幼児は、母親を全体像として捉えることができない。またそれは自分においても同様であり、自己についての統合性がなく、身体は寸断された状態にある。幼児は摂取や投射を通して、不安な自己を分裂させ廃棄しようとするし、母親を悪しき乳房と善き乳房に分裂させる。また悪しき対象に対して幼児の攻撃性が投射され、乳房はさらに断片化されていく。断片化された悪しき対象は母親へと投射され、母乳という形に変換されて幼児の身体に摂取される。摂取された食物は、有毒性を持っており、幼児の身体を爆発させるような迫害者となる。この迫害を逃れるために善き乳房からの摂取を行うが、この善き対象に悪しき対象が隠されていないとも限らないので、善き対象も断片化される。そして口唇性（摂取）は、摂取された悪しき対象を排

泄するために肛門性に引き継がれる。「摂取と投射［と排泄］のシステム全体が深層での、深層による物体［corps］の交流である」[18]。摂取され排泄される部分対象をドゥルーズはシュミラクルと呼ぶ。以上のような迫害妄想と部分対象への分裂、摂取と投射のシステムは、クラインに倣って、妄想‐分裂態勢と呼ばれる。

ところで、善き対象は幼児に充足感を与えるものであって、完備なもの（le complet）である。それが分裂態勢において断片化されることは考えられない。善き対象は、口唇的あるいは肛門的な悪しき部分対象とは反対に「一切の摂取や投射を放棄したことで、その代価として完備となった、口も肛門もない、器官なき身体である」[19]。ドゥルーズに従えば、深層には投射と摂取によって交流する寸断された身体と、部分もなく流動的な完備な身体の二極がある（ここで、クラインとアルトーの接続が為されている）。完備な身体は、アルトーの表現を用いて、器官なき身体あるいは栄光という情動に満ちた身体[20]と呼ばれる。寸断された身体を生きる幼児は、悪しき部分対象の迫害を逃れようと、未分化な器官なき身体へと向かおうとする（第一次ナルシシズム）。身体のこの二極の間で物体の受動・能動の緊張関係が生まれる[21]。

しかし、善き対象には別の態勢がある。それは深層にではなく、高所にあって「超自我」と呼ばれる。幼児は善き対象を求めて深層へ落ちる手前で、高所へと方向を変える[22]。抑鬱態勢への移行が始まる。

2‐2．抑鬱態勢

抑鬱態勢は「同一化」のシステムである。この態勢では、超自我‐自我‐イドの三項関係が成立している。超自我は善き対象、自我は幼児、イドは部分対象の貯蔵庫にあたる。ここで中心的な働きを占めるのは、超自我である。超自我は自我が完備さを得ようとして自分と同一化しようとする限りで愛を与え、自我が悪しき部分対象（イド）に哀れみを持って同一化しようとするとき、憎悪する[23]。超自我が自我に愛と憎悪を与えるこのシステムに決定的なことは、超自我が自我に対して既に失われているという仕方で現前している、ということである。超自我は、深層を構成する要素ではなく、別の次元で、深層の時間に対して先在するものという特性を持つ。その次元は高所と呼ばれる。

超自我のこの特性は、自我の同一化を常に逃れていくことで、自我に失望を起こさせることになる。

「失われたものとしてこそ、善き対象は一度目に〈再び見出されたもの〉としてしかそれを見出さない者（善き対象に己を同一化する自我）にその愛を与えるのであり、既にそこにあったものとして〈発見された〉何物かとしてそれを攻撃する者―内的［部分］対象を甘受している自我―にはその憎悪を与える。…それゆえ失望から出発することではじめて、失われた対象としての善き対象は愛と憎悪を配分するのである。」[24]

善き対象への失望が愛と憎悪の源泉になっていること、これが意味しているのは次のことである。要するに、分裂態勢においてなら分裂させられるはずの愛と憎悪が、ひとつの源泉を持つこと、つまり分裂に対して統合性を与えることを意味しているのである。

このような善き対象はイドラとも呼ばれ、その特性は「完備(統合性)」であることと「それがない場所で作用する」ことにある。自我の完備さへの同一化は、身体が寸断された状態から未分化な流体へと移行する手前で、ばらばらのものを部分として組織化することへと向かわせる。それは具体的には部分表面、別の言い方では性感帯を形成するよう促すという作用となる。また「ない場所で作用する」ことは、高きところからの「声」という形で、まだ言葉の組織を持たない深層の雑音環境に介入することを示す。これは幼児に言葉の次元を用意する作用であり、母親との愛憎関係の形成と超自我による禁止を準備する。しかし、まだこの段階では言葉は組織化されない。

2-3. 性的-倒錯的態勢

ドゥルーズによれば、高所は深層を孔として見出す[25]。その孔は口であったり肛門であったりする。そしてこれらの孔は周囲に領土を作り、性感帯の部分表面となる。ここで性的-倒錯的態勢が始まる。性感帯はリビドー的欲動の源泉となり、表面の生産に関わる対象(イマージュと呼ばれ、内部に摂取されるシュミラクル、失われたものとして再発見されるイドラに対置される)と関係を結ぶ。性感帯は部分的なものであって、各性感帯にはそれに特有のイマージュを持つが、まだ身体表面の総体性はない。この各性感帯をつなぎ直接的で大域的な統合を行い[26]、身体を性的にするのは、ファルスという性器帯のイマージュの機能である。

ファルスはペニスが二重化したものである。ペニスは分裂態勢においては悪しき対象であり、抑鬱態勢では善き対象である。この悪しきペニスから善きペニスへの移行が、エディプス・コンプレックス、性器の組織化の条件となる。エディプス・コンプレックスは表面(性感帯や性的身体)を構成する操作である。母親はペニスが欠けていることで身体的に傷ついていると見なされる。父親は母親にペニスが欠けていることで、そこには不在であると見なされる。エディプスは善き意図に従って母親を修復し、父親を帰還させようと欲する。それはそこにはないペニスではなく、ファルスというイマージュによって為される。母とは近親姦という形で、父とは彼の代行という形で為されるのである。ところがこの行為は、母の欠陥を指し示すことで不安を呼び起こし、父の不在であるという仕方で現前するという特性を裏切ることで罪責感を呼び起こす。

このように意図された行為(修復と帰還)と為された行為(近親姦と代行)の間に齟齬が起こり、切断が生じるのである。意図された行為は、実際に為されることで否定・削除され、為された行為は行為者の意図とは異なるという仕方で否定される[27]。意図された行為は投射によって物理的表面へと投射され実現されるが、為された行為(意図された行為の成果)は物理的表面で実現している

ととは異なるものとして、別の表面へと投射される。その別の表面が形而上学的（超越論的）表面であって、為された行為は出来事と呼ばれる[28]。意図された行為と為された行為の切断は「もの」と「こと」の二つのセリーの差異であり、その差異を作る「否定」をファルスの「去勢」という。

2-4. 去勢、ファンタズム、セリー

去勢の役割は、性感帯の物理的表面から出来事が関わる形而上学的表面を引き離すことである。換言すれば、物体の能動・受動からその成果を引き出すのである。またリビドー的欲動のような性的エネルギーを脱性化することでもある。それは性感帯を代表する口から形而上学的表面としての脳への移行を示す。しかし、去勢は「もの」と「こと」を切断する過程であって、形而上学的表面を構成する過程ではない。では、それは何によって為されるのか？ドゥルーズはそれをファンタズムの役割だと考える[29]。

ファルスが物の状態と出来事の間に線を引き、その線を去勢の痕跡と捉えることで、出来事をそれ自体で捉えることができるようになる。この純粋な出来事をドゥルーズは「ファンタズム」と呼ぶ。それは例えば母と父の性交を、実際に観察したにせよ、想像したにせよ、幻想する自我がそこにはいない光景を幻想することである。自我がその場所を占めない光景は、自我がそこに含まれている物体の混在、能動・受動から切り離されており、その意味で非物体的であり、観念的である。このようにファンタズムは、「自我が表面に開かれていく運動、自我が閉じ込めていた非コスモス的、非人称的、そして前-個体的な特異性を解放していく運動」[30]であり、非物体的な効果であって、象徴化 (symbolisation) とも言われる。そして象徴化は脱性化されたエネルギーとしての「思考」と関わる。思考とは、物の状態においては実現しなかったこと、思考においてしか実現できないことを扱う能力であり、形而上学的表面である「脳」に関わるとされる。このようにしてファンタズムは脳という形而上学的表面を構成するのである。

またファンタズムは、ドゥルーズによって別の役割を果たすことになる。ファルスによって意図された行為のセリーと為された行為のセリーへの切断が行われる。前者のセリーは物の能動・受動のセリーであり、後者は前者の成果、つまり出来事のセリーである。ファルスはこの二つのセリーの差異を作るが結び付けもするどちらにも属さないパラドクス的な対象＝xである。ファルスは去勢されることでファンタズムを生産するのだから、ファンタズムはこの二つのセリーのうちの出来事のセリーを指すように思える。しかしドゥルーズによれば、ファンタズムは二つのセリーの共鳴を指し示すという。ファンタズムは、「もの」と「こと」のセリーを共鳴させることで、個別的な出来事とは別に〈出来事〉(l'Événement)を生産し[31]、それがはじめて「意味」と言われる[32]、とドゥルーズは考えている。

以上が動的発生の構図である。

3．出来事のために身体に何ができるのか？

上で見たように、動的発生論はそれが精神分析の理論にどれほど依拠していようと、身体・物体(corps,chose corporel)を基底にした出来事の発生論であり、身体の有機体化が言葉の組織化に繋がっていくことを説く理論である。というよりもドゥルーズは、「物の状態とその深層、混合、能動と受動の上に、精神分析は最も明るい光を投げかける。しかしそれは、そこから生じるものの出現、表面の効果としての、別の本性の出来事に到着するためである」(33)と言うように、無意識の過程を心的メカニズムとだけ理解しているわけではなかったと言える(34)。

3‐1．身体の有機体化

では、身体はどのように有機体化されていくのか。

まず、妄想‐分裂態勢において寸断された身体と器官なき身体の二極がある。寸断された身体は、摂取や投射、排泄などを行う口‐乳房‐肛門であると同時に、分裂という過程を経てばらばらにされた身体であり、受動的である。器官なき身体は、摂取や排泄などを放棄して自己に閉じこもった未分化な流体であり、孔のない完備な球形とも言われ(35)、外部からの触発を受けないので能動的である。この態勢においては、口や乳房、肛門はまだ器官とは言えない。というのは、それらを部分とみなす全体が存在しないからである。ここでは身体はまとまりのない点か、切れ目のない流れでしかない。

分裂態勢においては、寸断された身体が未分化な器官なき身体へと向かう方向性を持つが、その運動に介入し、ばらばらな身体に統合性を与えて有機体化する方向へ導こうとするのが、抑鬱態勢であって、口や肛門などの孔の周りにテリトリーを作り、性感帯を構成しようとする。しかし、性感帯はまだ部分的なものであって、身体全体の表面を覆って、身体の全体像を形作るほどではない。

各性感帯を接合する役割を果たすのは、性的‐倒錯的態勢においてであり、ペニスの不在・去勢によって引き出されるファルスによってである。ファルスによる性感帯の接合が全身像を構成し、性的身体が出来上がる。性的身体は、善き意図に従ってファルスを用いて行為する身体であり、その行為の成果が行為者には耐え難いようなものになってしまうような身体である。そのときファルスが去勢され、ファルスが引いた「もの」と「こと」の間の線が去勢の痕跡となって、性的身体の物理的表面から脳の形而上学的表面へと身体は展開していくことになる。そして形而上学的表面が言葉と関わる限りでそれを発する口と切り離せない関係を結ぶことになる。というのも口は、性的態勢においてはしゃぶる口であって(36)、去勢による脱性化を通してそれから解放されることで、はじめて話す口となることができるのである(37)。

簡素化すれば次のようになる。

寸断された身体(口‐肛門‐乳房)／器官なき身体(未分化な流体)

→←

部分的な性感帯（口や肛門などの孔と周辺テリトリー）

／全身像という統合性

→←

接合された性的身体（ペニス／ファルス）

→←

脳／口（ファルスの去勢、言葉の獲得）。

（矢印は動的発生の各段階を示す。矢印が→←なのは、退行を含むことを示すためである。）

3‐2．情動の働き

しかし、身体はただ時間の経過に任せて段階的に有機体化されていくのではない。私たちが重視したいのは、ドゥルーズとクラインの両者にとって、身体の有機体化は身体を触発する情動との関わりの中で果たされていく、ということである。クラインの理論は一貫して、情動（不安や罪責感など）による身体の触発（分裂、摂取、同一視、修復など）に関する詳細な記述になっている。ドゥルーズの動的発生論も、クラインに依拠する限り必然的に情動と身体の関わりを描くことになる[38]。

その関わりは動的発生論においてどのように描かれたのか。分裂態勢において、情動は生存の不安として身体を触発する。その不安を摂食モデルの中で解消しようとするこの態勢では、身体に安心感と充足感を与える栄養や食物は善き対象となり、更なる不安を与える食物は悪しき対象となる。そのため、ここで言う善き対象と悪しき対象は道徳的なカテゴリーに属するのではなく、フロイトの快感原則における「快」と「不快」に近い。さらに言えば、スピノザやニーチェが重視した生存に関わる生態的なもの（「よい」「わるい」）とも親近性がある。不安を解消するために、身体は善き対象を摂取し、悪しき対象を粉々に破壊するという過程を採る。身体が寸断されるのは、悪しき対象から受ける不安を解消するためであり、器官なき身体は摂取と投射を放棄することで、栄光という情動を伴って、自己原因となる[39]。

抑鬱態勢においては、身体（＝自我）は完備さを求めて善き対象と同一化することで愛を、哀れみを持って悪しき対象と同一化することで憎悪を超自我によって与えられ、活動する。そしてこの愛憎関係は、超自我が自我に禁止を押し付ける根拠となる。つまり、自我が完備であろうとすれば、さらに言えば、愛を欲すれば、超自我は自我に悪しき対象に対する哀れみを禁じなければならない。なぜならそれは善き対象を傷つけるものであるから。そして自我がその禁止を侵すならば、超自我は自我に対して残酷に振舞う。さらに言えば、この禁止の侵犯によって罪責感という情動が自我を触発することになる。

性的態勢に移っても、引き続き罪責感が働く（もちろん全ての情動は、態勢が移行してもなくなったりはしない。情動も身体が有機体化するのと同様に態勢の移行によってその度に組織化される。しかし、動的発生は情動が発生していく過程でもあるのでこのような

記述になる)。母の身体がペニスの不在によって傷ついたものと見なされ、またペニスの不在によって父が不在であると見なされるとき、自我は母を修復し、父を帰還させようとする。このとき自我を突き動かすのは、ドゥルーズは善き意図と言ったが、クラインであれば償いという情動である(40)。母の傷と父の不在を自己の責任として引き受けるのである(41)。善き意図にせよ、償いにせよ、その行為は意図したものとは異なる成果を生むことになり、それによって罪責感が生まれ、ファルスの去勢へと身体を触発する。このとき情動は、分裂態勢における生態的カテゴリーから、超自我による禁止や罪責感などの倫理的カテゴリーに移行していることが分かる(42)。そしてファルスの去勢によって、情動は切り離され、非情な出来事が生産されることになる。

3‐3.『意味の論理学』における**corps**の概念

ドゥルーズが身体・物体(corps)をどのように考えていたのかをまとめよう。彼にとって、身体は情動に満たされており、情動に突き動かされて自己を有機体化していくものである。そしてその有機体化は言葉の組織化へと関わっていく。情動や言葉とこのような関わりを持つ限りで、物体と言うよりは身体と呼ぶほうがふさわしいかもしれないが、ドゥルーズにとって物体/身体の区分けが必ずしも厳密とは言えない。

例えばドゥルーズは、アルトーの「器官なき身体」という観念によって、火や大洋、全てを混在させ流れていく不定形の質料性を表す(43)。その一方で、それはフロイトのタナトス概念と重ね合わされ、有機的生の不安定性から逃れ、安定をもたらすただの物質としての死の身体をも表す(44)。ところがこの身体は生殖の母胎でもあり、生命の源泉としても捉えられている(45)。また言語の水準で、分節のない音調的価値(息、叫びなど)を表す(46)。さらに、それは栄光という情動に満ち満ちたものとして描かれるのである。そして、ドゥルーズが死は出来事であると言い、タナトスが思弁的な領野にしか属さないと言うとき、彼は身体を次のように考えているだろう。つまり、身体は死んだりしないし、死んでいるのでもない。むしろ、身体と情動の秩序によって思弁的領野を構成し、死を出来事として生産するものなのだ(動的発生)。そしてこのことは、身体が死にも生にも向かう欲望であって、身体・物体はそれだけで生命であることでもあるのだ、というように。

このように、ドゥルーズは動的発生に関わる身体・物体を、客観的な延長体や論理学的な一般性や法則の秩序に従う物体とは考えていない。では、論理学の対象としての物体や客観的な延長体はどこへ行ってしまうのか?彼に従えば、それらは静的発生によって構成される個別者と一般性の世界、第三次配置と呼ばれる世界にある。そしてドゥルーズにとって、この世界の延長体は動的発生の身体性に比して、まったく軽視される(47)。このように見れば、彼にとって**corps**は身体か物体かという仕方で区別されるよりも、形而上学的(超越論的)表面を構成する「もの」なのか、そこから構成された「もの」なのかという視点で区別されることのほうが重要である、

と言えるだろう。

このような観点を取るとき、私たちは江川隆男の「反‐実現論」には賛成できなくなる。「動的発生は、むしろ現働的なものから出発して当の潜在的なものそれ自体の発生を問題にすることであり、…」(48)と江川が言う時、彼が主張しているのは、本稿の言葉で言えば、動的発生とは超越論的表面によって構成された「もの」からその表面を発生させることだ、というものである。江川の主張からは、超越論的表面を構成する「もの」とそれから構成される「もの」との区別が見出せない。それは、彼が区別されるべき二つの「もの」を「現働化したもの」というひとつの言葉で呼んでしまうからである。しかし、現働化したものが潜在的領野から現働化したものである限り、それはドゥルーズが言う静的発生による第三次配置に当たるはずである。第三次配置における「もの」は、超越論的表面を経ているのだから、言語構造の中に位置を持っており、また論理学の対象なのであって、指示や表出、真偽と関わる(49)。そのため、そこでは動的発生論の眼目である質料の力動性を言うことは、できないのである。そうであれば、どのようにして第三次配置から超越論的表面を発生させることができるのか?(50)

私たちがドゥルーズの身体論を徹底したいならば、重要なのは、「こと」を反‐実現する「もの」と、「こと」が実現される「もの」とを区別することなのである(51)。

おわりに

本来ならここから、身体の有機体化が言葉の組織化にどのように関わるかを描くべきだが、紙数の都合上それは別の機会に譲りたい。最後に、保留していた動的発生論の戦略に関する批判点を述べておこう。この批判は、ドゥルーズの意図に反して、アルトーの身体論の見地から為される。

私たちは、「出来事のために身体に何ができるのか?」という問いから動的発生を見ていくことで、出来事が発生する過程としての身体の有機体化を描き出した。ところで、身体の有機体化は、身体の本来的なあり方なのか?つまり、身体の有機体化は出来事の発生にとって必然的なことなのであって、身体自身にとっては偶然的なことなのではないか?言い換えれば、動的発生論は出来事に従属した身体論なのではないか?なぜ、ノイズや流体のままではいられないのか?確かにドゥルーズなら、出来事は物体の能動・受動の効果であって、「出来事以上に、物体に親密で本質的なことがあるだろうか(52)」と反論するだろう。しかし、動的発生論において身体が有機体化するのは、明らかに出来事の発生を基礎付けるためである。つまり動的発生論は、生産される出来事によってそれを生産する身体が方向付けられるという、歪な順序で描かれているのである。このように考えてしまうと、出来事は物体の結果・効果ではなく、身体の目的となってしまう。

なぜ、このようになってしまうのか？それはクラインの理論に由来する。彼女の理論はエディプス以前の過程を描くことができたのにも関わらず、フロイトのエディプス理論を基礎付けるという目的に明らかに従属している。ドゥルーズが彼女の理論を援用する限り、そして精神分析一般を「出来事の科学」(53)として援用する限り、この構図を免れることはできないのである。

では、どう考えれば出来事に非従属な身体論、身体それ自身による身体論を描くことができるのか？アルトーなら次のように言うだろう。

「身体は身体である、
ただそれだけで存在する
そして身体は器官を必要としない、
身体は決して有機体ではない、
有機体は身体の敵だ」(54)

ドゥルーズから見出したように、有機体が身体の従属を意味するなら、有機体が身体の敵であるという見解は正しい。私たちが身体それ自身による身体論を考察するなら、アルトーに倣って、身体が有機体化するのとは異なる形の身体論を構築するべきである。実際、『アンチ・エディプス』から始まる、ドゥルーズの身体論はこのアルトーの指摘を踏まえているだろう。そこでは、動的発生論はどのように描き直されるのか？

結局、「出来事のために身体に何ができるのか？」という問いとは何だったのか？『意味の論理学』における身体論が、出来事に従属した身体論であると指摘できたのは、この問いの働きによる。そしてそのために、動的発生論は決定的な打撃を受けたかのように見える。しかし、動的発生論が扱った「もの」から「こと」への移行の問題、そして身体と情動の関わり方の問題は、私たちにとって重要かつ魅力的なものであることには間違いない。だからこそ、上の問いを次のように問い直すことで、これからの展開としよう。

「アルトーやドゥルーズによる非有機体的身体論は可能か？可能だとすれば、それはどのようなものか？」
「そのような身体論が可能なとき、出来事論はどのように書き換えられるのか？」

注

(1) Deleuze, Gilles. "Réponse à une question sur le sujet." *Deux régimes de fous*. Paris:Minuit, 2003. pp.327-328. [ ] 内は筆者による補足。

(2) この論文において主体の哲学者たちとして名指されるのはヒューム、カント、フッサールである。しかし、『意味の論理学』において批判されるのは、これら哲学者ではなく、論理学者たちである。その中にはラッセル、フレーゲ、そしてまたフッサールが含まれる。

(3) 実際は、命題が「無意味」であることもあるし（第11のセリー（id. *Logique du sens*. Paris:Minuit, 1969. pp.83-91.）［以下、*Logique du sens* からの引用は、*LS* と略記する。］）、出来事が物の状態の内に「実現しない」こともあり得る（第21のセリー（*LS*.pp.175-179））。そして、

このことが『意味の論理学』の重要な論点を構成しているのだが、本稿の趣旨を逸脱するために、ここでは扱わない。また、「今のところ」というのは、後に見るように、動的発生を描くうちに意味も出来事もドゥルーズによって別の仕方で見出されるからである。

（4）静的発生については、檜垣立哉『『意味の論理学』における静的発生と動的発生について(1)」,『年報人間科学』、第二六号、二〇〇五年、一三三‐一五三頁を参照。

（5）*LS*.p.217.

（6）*LS*.p.217.

（7）個別的モナドの身体については第１６のセリー（*LS*.pp133-142）を参照。

（8）「ハンス少年の分析で、フロイトは他のすべての場合と同様に、児童分析の方法を私たちに示している」。Klein,Melanie."The development of a child."*Love,Guilt and Reparation and Other Works*. London:Karnac Books,1992.p.25.

（9）id. *The psycho-analysis of children*.Vintage, 1997. p.14.

（10）松木邦裕、『対象関係論を学ぶ　クライン派精神分析入門』、岩崎学術出版社、一九九六年、一一頁。

（11）Klein,M. "Some theoretical conclusions regarding the emotional life of the infant. "*Envy and Gratitude and Other Works*.London:Karnac Books, 1993.pp.61-93.

（12）ドゥルーズと精神分析も関わりを扱ったものに、David-Ménard, Monique. *Deleuze et la psychanalyse*. Paris : puf, 2005. がある。しかし、この著作ではクラインについては触れられていない。

（13）引用は Artaud, Antonin. *Artaud Œuvres*. Paris : Gallimard, 2004. p.1470. 物質の流動性については "Héliogabale ou l'anarchiste couronné." pp.405-474. を、イメージの物質性については "Réponse à une enquête." pp. 306-309. を、呼吸の情動性については "Un athlétisme affectif." pp.584-589. と "Le théâtre de séraphin." pp.595-599. を、絶対的唯物論については"[Notes pour une 《Lettre aux Balinais》] ." pp.1468-1500.を参照。

（14）*LS*.p.108.

（15）*LS*.p.111.

（16）*LS*.p.220.

（17）*LS*.p.218.

（18）*LS*.p.218. [ ] および[ ]内は筆者による補足。

（19）*LS*.p.219-220.また、アルトーにおいては例えば Artaud, A. op. cit. p. 1671.を参照。

（20）第１３のセリー（*LS*.p.113.）を参照。

（21）第２７のセリー（*LS*.p.224.）を参照。

（22）第２７のセリー（*LS*.p.221.）を参照。「深層」や「高所」、「表面」という用語は、クラインやその他の精神分析に由来するものではなく、ドゥルーズによる古代哲学の分類法から適用されたものである。深層は前ソクラテス派に、高所はプラトンに、表面はストア派に当たり、順に分裂態勢、抑鬱態勢、性的態勢に適用される。第１８のセリー（*LS*. pp.152-158.）を参照。

（23）第２７のセリー（*LS*.p.222.）を参照。

（24）*LS*.pp.222-223. [ ] 内は筆者による補足。

（25）*LS*.pp.229-230.

（26）*LS*.p.233.「直接的」という言葉でドゥルーズは、ラカンの鏡像段階を間接的な身体の統合作用（視覚による先取り）として捉えることで、フロイトの性理論を擁護する立場を表している。

（27）第２９のセリー（*LS*.p.241.）を参照。

（28）第２９のセリー（*LS*.pp.241-242.）を参照。

（29）「ファンタズムは、非物体的なものを構成する過程である」(*LS*.p256.)。しかし、クラインの理論では、幼児はその始まりからファンタズムを使用している。むしろ全てはファンタズムのなかで起こるかのように。

(30) *LS*.p.249.

(31)「私たちの用いる術語において、それゆえ重要なのは、実を言えば個別の出来事ではなく、独立したイマージュの二つのセリーであって、ファンタズムにおけるそれらの共鳴によってしか自らを解放しない〈出来事〉(l'Evénement)なのである。」(*LS*.p.263.)。

(32) 第34のセリー (*LS*.p.281.) を参照。

(33) *LS*.p.246.

(34) しかし、無意識という用語はあえて避けられており、無意味という用語に置き換わっている。これは無意識が心的メカニズムを想起させてしまうのを防ぐと同時に、意味の発生を無意味の働きから考察しようという意図を反映していると思われる。

(35) 第29のセリー (*LS*.p.237.) を参照。

(36) 分裂態勢においては食べる口であった。つまり、口は食物 - 性器 - 話し言葉というふうに段階的に異なった対象によって満たされている。

(37)「脳の勝利だけが、もし脳が生じるならばではあるが、話すことのために口を解放し、排泄物のような食物と退去する声から口を解放するのであり、そして一挙にあらゆる可能な話し言葉で口を養うのである。」(*LS*.p.260.)。

(38) 身体と情動の関わりについて、ドゥルーズはスピノザからも多くを負っている。例えば、Deleuze, G.*Spinoza Philosophie pratique*. Paris:Minuit, 1981. を参照。

(39) 第28のセリー (*LS*.p.231.) を参照。

(40) 例えば Klein, M. *The Psycho-Analysis of Children*. の11章と12章 (pp.194-278.)を参照。

(41) ドゥルーズが描く以上にクラインのほうが情動に関して豊富な知見がある。それはドゥルーズがクラインの『児童の精神分析』だけを参照しているのに対して、クラインにはそれ以降にも発展（羨望や感謝など）があることから来る。*Love, Guilt and Reparation and Other Works*. や *Envy and Gratitude and Other Works*. を参照。

(42) 第29のセリー (*LS*.p.241.) を参照。

(43) 主に第13のセリー (*LS*.pp.101-114.) と第27のセリ (*LS*.pp.217-227.) を参照。

(44) Deleuze, G et Felix Guattari. *L'anti-Œdipe*. Paris:Minuit, 1972. p.44. あるいは pp.393-396.

(45) id. *Mille plateaux*. Paris:Minuit, 1980. pp.202-204.

(46) 第13のセリー (*LS*.p.108.) を参照。

(47) 第16のセリーと第17のセリー (*LS*.pp.133-151.) を参照。

(48) 江川隆男、『存在と差異』、知泉書館、二〇〇三年、八一頁。

(49) 第17のセリー (*LS*.pp.142-151.) を参照。

(50) 江川は動的発生を身体論ではなく、時間論として論じている。これ自体は重要な観点であり、時間が身体やその質料性とどのように関わるのかという更なる研究を触発させるものである。

(51) 第21のセリー (*LS*.p.176.) を参照。

(52) *LS*.p.14.

(53) *LS*.p.246.

(54) Artaud, A. *Œuvres complètes*. Paris : Gallimard, 1974. p.285.

L'événement et le corps dans «la genèse dynamique», chez Gilles Deleuze.

YAMAMORI Yuki

Ce manuscript s'intéresse à la genèse dynamique, suivant un concept du corps,que Gilles Deleuze a expliqué dans *Logique du sens.*

L'un des thèmes de *Logique du sens* est l'analyse du système qui permet au sens d'être produit.La sémantique se limite généralement à une investigation de la langue,mais elle est expliquée par Deleuze comme un système impliqué dans les états du corps. Car on peut parler avec son corps. Pourtant le corps ne peut certainement pas parler au début comme c'est le cas des enfants.

Alors, comment le corps est-il organisé pour acquérir le parole?Deleuze étudie ceci avec la psychanalyse d'enfants faite par Melanie Klein. Or, Deleuze pense qu'il y a un point commun entre la genèse du sens et la genèse de l'événement. Donc l'organisation du corps concerne aussi la genèse de l'événement. La genèse dynamique chez Deleuze est le processus de l'organisation du corps. Et outre le corps, c'est l'affect qui est important pour comprendre ce processus.

Dans ce manuscript, j'étudie une raison par laquelle Deleuze a cité la psychanalyse de Melanie Klein, dans la premèire partie. Dans la deuxième partie,je décris la composition de la genése dynamique. Et dans troisième partie, j'étudie comment le corps est en relation avec l'affect dans la genèse dynamique.

Key words : Gilles Deleuze, la genèse dynamique, l'organisation du corps, l'événement, l'affect